人造人間と創造の多元性

――ハンス・ハインツ・エーヴェルス『アルラウネ』における人工授精科学と「思想」について

Die künstlichen Menschen und die Pluralität der Schöpfung:
künstliche Befruchtung und „Gedanke“ in Hanns Heinz Ewers’ *Alraune*.

相馬 尚之
SOMA, Naoyuki

はじめに

20世紀の初めから戦間期にかけて活躍したドイツの作家ハンス・ハインツ・エーヴェルス（Hanns Heinz Ewers 1871–1943）は、小説『アルラウネ』（1911）において、帝政期の頽廃的な市民社会、男女の性愛、急速に発展する科学への諷刺などを織り交ぜながら、人工授精によって誕生した少女アルラウネの生涯と周囲の男達に起こる破滅を描いた。

死刑囚の精液が地に落ちて生じる木の根アルラウネの伝説に着想を得たフランク・ブラウンは、叔父の医師・枢密顧問官ヤーコプ・テン・ブリンケンを唆し、死刑囚の精液を売春婦アルマ・ラウネに注入する人工授精手術により伝承を科学的に実現する。生まれたアルラウネ・テン・ブリンケンは次第に男たちを惑わす運命の女（ファム・ファタール）となり、遂にはヤーコプを自殺に追い込む。枢密顧問官の死後、フランクとアルラウネは次第に恋に落ち、堕落していく。ある晩フランクは夢遊病状態で屋根の上を歩くアルラウネを見つけ、彼女をそこで覚醒させるか逡巡する。だが彼が叫ぶ前に、同居人フリーダ・ゴントラムがアルラウネと共に墜死し、フランクは館を去る[1]。

この小説は当時のベストセラーであったが[2]、その後の文学研究ではさほど重要視されず、そればかりかエーヴェルス自体が、第二次世界大戦後から1960年代にかけてほとんど研究されなかった[3]。彼が長らく顧みられなかった理由は、第一にその作品の通俗性にあり、彼は人工授精等の科学のみならず、同性愛や小児性愛といった倒錯的性愛やドッペルゲンガー等の大衆の嗜好を反映した数多の要素を小説に組み入れ商業的な成功を収めたが[4]、文学研究では低級な通俗作家としての評価を免れなかった[5]。加えてエーヴェルスは、ナチスとの密接な関係を問題視された。確かに彼はプロパガンダ小説『ホルスト・ヴェッセル』（1932）を執筆し、その映画化も担当するなど、ナチスに親近感を抱いていたことは明らかだが[6]、1935年には『アルラウネ』、1937年には全ての著作の発禁処分を受けており、必ずしもナチスと思想的に同一であったとは言えず[7]、むしろ新たな研究は反ユダヤ主義者ではなかった点を強調し、彼の名誉回復を進めてきた[8]。

1 Hanns Heinz Ewers, *Alraune: die Geschichte eines lebenden Wesens.* (München: Georg Müller, 1925). 以下、同書からの引用は本文中内にページ数のみを記す。原文の隔字体を本文では**ゴシック体**とし、原文のイタリック体には傍点を付した。別途注釈の無い場合、以下同様とする。翻訳はハンス・ハインツ・エーヴェルス（麻井倫具、平田達治訳）『アルラウネ』上下巻、国書刊行会、1979年を適宜参照した。

2 Wilfried Kugel, *Der Unverantwortliche: Das Leben des Hanns Heinz Ewers.* (Düsseldorf: Grupello Verlag, 1992), S. 165; Klaus Gmachl, *Zauberlehrling, Alraune und Vampir: Die Frank Braun-Romane von Hanns Heinz Ewers.* (Norderstedt: Books on Demand GmbH, 2005), S. 37–41.

3 Hannah Dingeldein, „≫Schwerttag, Kriegstag, Bluttag≪ zu Hanns Heinz Ewers’ Weltkriegsroman *Vampir. Ein verwilderter Roman in Fetzen und Farben.*“ *Zagreber germanistische Beiträge. Jahrbuch für Literatur- und Sprachwissenschaft* 25 (2016), S. 219.

4 同時代の精神分析家オットー・ランクは、『アルラウネ』の書評で近親相姦空想や子供の多形倒錯傾向との関連に言及している。Otto Rank, „≫Alraune≪ von Hanns Heinz Ewers.“ *Imago* 1 (1912): 538–540.

それでもエーヴェルスとナチスの親和性は、『アルラウネ』の解釈において重要な論点の一つである。エーヴェルスの伝記を著したヴィンフリート・クーゲルは、この小説にナチスの生命の泉（レーベンスボルン）に対する先駆性を認め[9]、またウルリーケ・ブランデンブルクはアルラウネの人工的創造とアーリア人主義の関連を指摘した[10]。確かに両者には、人間の再生産の人為的管理に対する関心が潜在しているが、『アルラウネ』は死刑囚の精液を注入した売春婦の胎から生まれた少女を描いており、人種主義よりも猥雑さと科学的好奇心が際立つ。またナチスに限らず人種主義や優生学が当時の社会に広く流行していたことからすれば、「エーヴェルスはナチスの人間培養を予見していたのではなく、同様の科学的イデオロギー的基盤に関わっていた、とする見解がより整合性があろう[11]」とクレメンス・ルトナーが述べたように、『アルラウネ』は生命の泉（レーベンスボルン）の予言というよりも、生殖に関する最新科学の広範な社会的および文化的影響の一例と言えよう。

科学受容としての『アルラウネ』は、人々の科学に対する関心と並び、科学の実証的成果と小説家による空想の境界の曖昧さを示す[12]。エーヴェルスが人工授精を主題に小説を著した一方で、当時の科学者たちは『アルラウネ』を大衆の人工授精に対する意見の証左として用いた[13]。実験生物学の示した人工授精の可能性は、文学や社会の好奇と恐怖の内に育まれ、医学的主張の補強材ともなった。そして『アルラウネ』に関する現実と虚構の混淆の最たる例は、小説家サミー・グローネマン（Sammy Gronemann 1875–1952）による、第一次世界大戦時にオランダからドイツ軍が撤退する際の焼却処分の記録に示される。

> 一層奇妙だったのは、押収されたH・H・エーヴェルスの『アルラウネ』の本の巨大な山に遭遇した時だ。［…］長い間、私はどのような類の軍事的あるいは政治的に危険な箇所が、小説の中に含まれていたのか明らかにできなかった。ついに私は、その本は政治的に極めて深刻であることを知った。アルラウネは、その誕生を世間一般の好まれた方法に負うのではなく、人工生殖の産物である。もし本が協商の手に落ちたら、つまり演繹して、ドイツの人口はあまりに減少しているので、もはやそのような方法をとらねばならないと思っていると、向こう側は受け取ることもあろう[14]。

『アルラウネ』の焚書は、世界大戦という未曽有の事態ゆえに生じた、進歩に向け突進する科学主義と怪奇小説の特異的な混同であったかもしれない。だが、フランスの思想家ロジェ・カイヨワは、エーヴェルス再評価の契機となった幻想文学の定義を試みた際に、すで

5　エーヴェルスに関し、大衆文学と高尚な文学の区別への批判もある。Barry Murnane und Rainer Godel (Hrsg.) *Zwischen Popularisierung und Ästhetisierung: Hanns Heinz Ewers und die Moderne.* (Bielefeld: Aisthesis Verlag, 2014).

6　エーヴェルスとナチスの関係については、Kugel, S. 302–334.

7　Kugel, S. 357–358.

8　Gmachl, S. 41–54. マリオン・クノブロッフは、「ナチス時代にエーヴェルスは一種の『国内亡命』を生き、そこで彼はユダヤ人の逃亡を助け、密かにナチス時代への『諷刺』を著した」と評している。Marion Knobloch, *Hanns Heinz Ewers: Bestseller-Autor in Kaiserreich und Weimar Republik.* (Marburg: Tectum Verlag, 2002), S. 232.

9　Kugel, S. 426–427.

10　Ulrike Brandenburg, *Hanns Heinz Ewers (1871–1943) Von der Jahrhundertwende zum Dritten Reich: Erzählungen, Dramen, Romane 1903–1932.* (Frankfurt am Main: Peter Lang Europäischer Verlag der Wissenschaften, 2003), S. 179.

11　Clemens Ruthner, *Unheimliche Wiederkehr: Interpretationen zu den gespenstischen Romanfiguren bei Ewers, Meyrink, Soyka, Spunda und Strobl.* (Meitingen: Corian-Verlag Heinrich Wimmer, 1993), S. 118–119.

12　リンダ・レスカウは世紀転換期の独文学と性科学について「文学と性科学の間の**知識の交換**は、決して一方的ではなく、むしろ相補的であった」と指摘する。Linda Leskau, Botanical Perversions: On the Depathologization of

に科学と幻想文学の不可分性を指摘する。カイヨワは、「幻想とは、ほとんど耐えがたいまでに異常なスキャンダル、裂け目、闖入として、現実界内にその姿をあらわすものである[15]」としたが、そのような尋常ではない現象は他方では合法則的な日常を前提とせねばならない以上、「諸現象の合理的かつ必然的秩序という科学的概念が勝利を収め、因果の連累に厳密な決定論が認知されていなければ、幻想小説はあらわれえない[16]。」また批評家ツヴェタン・トドロフも、「幻想とは、自然の法則しか知らぬ者が、超自然と思える出来事に直面して感じる『ためらい』のことなのである[17]」として、合理的解釈に定まらない曖昧な状態にこそ幻想を認めた。エーヴェルスはこの科学と幻想の相補性を巧みに活用し、民話と人工授精を重ね合わせ、一方ではセンセーショナルな新発見への嫌悪と不信に、他方では科学的合理性への全般的な信頼に基づく『アルラウネ』を執筆した。

以後の研究者は、『アルラウネ』が幻想文学に属するか議論を重ねた。この小説内の出来事は科学技術や偶然によって説明可能であり、厳密には幻想文学には属さないとの指摘もあるが[18]、それでもマリアンヌ・ヴンシュは、幻想文学やSFのジャンルの境界の不確かさから、エーヴェルス時代の幻想文学について次のように述べる。

> 1890–1930年には、幻想的要素のあるテクストと現実に即したテクストは、範疇的に異なる構造を持つ文学の2つの厳密に区別された部類を形成しているのではなく、両者とも形式は連続している。その共通の分母は、その時代に当初から明らかであった正常性からの逸脱の傾向である。そこでは幻想自体この傾向の一つの境界例に過ぎず、人間の極端な状況の現実に即した描写とは、心理学や病理学に還元された幻想の数多の形式によって結びつけられている[19]。

『アルラウネ』に登場する病理的な性的倒錯と道徳的規範からの逸脱により特徴づけられる登場人物たちの行動は、同時に伝説を連想させる少女の抗いがたい魅力に起因させられる。クラウス・グマッハルは、『アルラウネ』内の出来事は科学的に説明可能であると幻想文学への分類に留保をつけつつも、一義的な解釈を妨げるこの小説の「**構造的な二義性ないし多義性**[20]」を評価した。『アルラウネ』において重要なのは、幻想をもたらす不確実性が、常に現象の原因の複数の説明可能性によって担保されるために、そこに科学と魔術の混ざり合いの余地が常に生じることである。

本稿では、この文学と科学の想像力の交錯の観点から、エーヴェルスの『アルラウネ』を検討する。独文学者タンヤ・ヌッサーは、

Perversions in Texts by Alfred Döblin and Hanns Heinz Ewers. In. Robert Craig and Ina Linge (eds.) *Biological Discourses: The Language of Science and Literature around 1900.* (Oxford: Peter Lang, 2017), S. 214. 強調原文。

13　オーストリアの婦人科医ハインリッヒ・キッシュ（Heinrich Kisch 1841–1918）は『アルラウネ』を大衆の人工授精に対する警戒感の表れとみなした。Heinrich Kisch, „Über künstliche Befruchtung beim Menschen.“ *Zeitschrift für Sexualwissenschaft* 1. 2 (1914), S. 71–72. 反対にドイツの医師ヘルマン・ローレダー（Hermann Rohleder 1866–1934）は「この小説は逆に、国民がこれまでいかに啓蒙されてこなかったかの証拠とみなしうる」と述べた。 Hermann Rohleder, *Monographien über die Zeugung beim Menschen.* 2. Aufl. (Leipzig: Georg Thieme, 1918), S. 294.

14 Sammy Gronemann, *Hawdoloh und Zapfenstreich: Erinnerung an die ostjüdische Etappe* 1916–18. (Berlin: Jüdischer Verlag, 1924), S. 242.

15　ロジェ・カイヨワ（三好郁郎訳）「妖精物語からSFへ」『世界幻想文学大全　幻想文学入門』東雅夫編著、ちくま文庫、2012年、272頁。

16　カイヨワ、274頁。

17　ツヴェタン・トドロフ（三好郁郎訳）『幻想文学論序説』東京創元社、1999年、42頁。

18 Winfried Freund, Hanns Heinz Ewers: Alraune. In. Winfried Freund und Hans Schumacher (Hrsg.) *Spiegel im dunklen Wort: Analysen zur Prosa des frühen 20. Jahrhunderts.* (Frankfurt am Main: Peter

人工授精について、ドイツ出身のアメリカの生物学者ジャック・レープ（Jacques Loeb 1859–1924）のウニの単為発生実験との関係を指摘した[21]。ヌッサーはレープの実験や人造人間を扱った文学や映画における男性の単為生殖願望の系譜を踏まえつつ、人工授精の社会的影響および『アルラウネ』における父や家族の問題に焦点を当てた。

しかしレープは、人工授精のみによって有名になったのではない。エーヴェルスは1925年の『蟻』において、あらゆる生命現象の物理的化学的還元を試みるレープの科学観に強く反発し、物質ではなく心理や思想、あるいは「それ（Es）」が根源であると訴えた。そしてこれは『アルラウネ』において、「馬鹿げた思想の不埒な悦楽から生まれた――人間でも動物でもない――奇妙な生き物（keine Menschen, keine Tiere — seltsame Wesen, die aus der verruchten Lust absurder Gedanken entsprangen）」（5）として具現化され、その不可思議な力を通じて、人工授精技術のみならず創造主たちを破局に誘う。エーヴェルスと当時の科学の関係において問題となるのは、人為的生殖の可能性のみならず、人間の本能や行動を物質と化学反応に還元し尽くすことを訴えた、当時の機械論的科学観そのものの是非である。

そこで本稿では、当時の生物学を踏まえつつ、『アルラウネ』における現象の説明可能性について再検討することを目指す。第1節では、当時の人工授精技術との関係から、アルラウネの人為的誕生にいたる方法と経緯を中心に確認する。第2節では、レープの向性理論を踏まえつつ、アルラウネの活動における科学的合理性と魔術的驚異の混淆と、周囲の男たちの悲劇を検討する。アルラウネは確かに男を破滅させる運命の女だが、同時に彼女は男たちの欲望の投影面であり、真の原因は彼ら自身に認められうる。しかしこの欲望は、男たちの管理の及ばないものなのだ。第3節では、思想の父を自認したフランクの地位とアルラウネとの闘争における敗北について、エーヴェルスの思想と創造性に関する評論等を踏まえ検討する。『アルラウネ』は、人工授精による少女アルラウネの創造とその悲劇の物語を通じて、科学の人為的な生殖支配の試みと共に、その機械論的かつ還元主義的な世界観そのものを戯画化したのである。

第1節　世紀転換期の人工授精――科学および小説での展開

1.1. ジャック・レープによる人工単為生殖実験

性交等に障害があるために精液を直接女性器に注入する形式の人工授精の歴史は古く、1780年代にはラザロ・スパランツァーニ

Lang, 1983), S. 35–49; Thomas Wörtche, *Phantastik und Unschlüssigkeit: zum strukturellen Kriterium eines Genres. Untersuchungen an Texten von Hanns Heinz Ewers und Gustav Meyrink.* (Meitingen: Corian-Verlag, 1987), S. 80–92.

19 Marianne Wünsch, *Die Fantastische Literatur der frühen Moderne (1890–1930): Definition, denkgeschichtlicher Kontext, Strukturen.* 2. Aufl. (München: Wilhelm Fink, 1998), S. 73–74. 強調原文。

20 Gmachl, S. 253. 強調原文。

21 Tanja Nusser, *≫wie sonst das Zeugen Mode war≪: Reproduktionstechnologien in Literatur und Film.* (Freiburg: Rombach Verlag, 2011), S. 125–187.

(Lazaaro Spallanzani 1829–1799) によって犬や両生類での人工授精の成功が報告されている[22]。だが、「一般的に、人間における人工授精の可能性に関して確かな期待が形成されたのは、20世紀の初め[23]」であり、この時期に人工授精は、畜産業界や婦人医学において大きな技術的進展を見せたことに加え、頽廃への懸念や優生思想の流行、女性解放運動に伴う男女関係の変化を背景に、諸般の社会問題に対する方策として広く注目された[24]。

この再生産を巡る高揚の中で大きな注目を集めたのが、ドイツ出身の生理学者ジャック・レープと彼の人工単為生殖実験である。レープはウニの未受精卵に対して、適切な濃度のマグネシウムやカルシウム溶液で処理したのち海水に戻すといった操作を加えることで、適当な化学刺激があれば精子が無くともウニの卵子が発生可能であることを示し、これを人工単為生殖(artificial parthenogenesis)とした。この実験は科学者にとどまらず広く人口に膾炙し、彼を取材したジャーナリストのカール・スナイダーは、「私は物事の深奥に至りたい。生命を手中に収め、それで戯れたいのだ[25]」と発言したレープをプロメテウスやファウストになぞらえた。単為生殖実験は生命を恣意的に操作する科学者の姿と結合し、多くの社会的問題を含んでいたことから[26]、レープは「現代のファウスト[27]」とみなされた。

もっとも、大衆のみが科学に着想を得た空想を恣意的に膨らませたのではない。レープ自身もウニの単為発生を扱った論文の末尾で、「血中イオンの一時的な変化が哺乳類においても完全な単為生殖を可能とすることは、不可能ではないと思われる[28]」と述べ、ウニでの成功の先に哺乳類での実行可能性をほのめかした。また彼は、『アルラウネ』の出版と同年の1911年にハンブルクで開催された一元論者同盟の国際会議での講演において、「死んだ物質から人工的に有機体を創造するか、あるいはこれがあり得ないならば、なぜこの問題は解決できないのか明らかにする[29]」ことが、生物学の課題であると述べ憚らなかった。

大衆の想像力の産物のみならず生物学者らの目的設定もあり、レープの単為生殖実験は人造生命と容易に結びつき、『ニューヨーク・タイムズ』紙さえレープの人工単為発生実験に「生命の化学的創造[30]」の見出しを付けた。近代生物学の目的は現象の記述ではなく、「意のままにそれを引き起こせるまで生命現象を制御するか[…]、実験条件と生物的結果の間に数的関係を発見することに成功するかのいずれか[31]」と主張したレープによる、授精と発生の人為的な操作可能性の証明は、20世紀の初めの人工授精に対する大衆的熱狂のなかで極めて重要な実例であった。

22 R. H. Foote, "The history of artificial insemination: Selected notes and notables." *Journal of Animal Science* 80. E-suppl 2 (2002), p. 2.

23 Christina Benninghaus, "Great Expectations: German Debates about Artificial Insemination in human around 1912." *Studies in History and Philosophy of Biology and Biomedical Sciences* 38 (2007), p. 378.

24 クリスティーナ・ベニングハウスは「熱狂は不妊の意味の変わりつつある認識に由来する(p. 382)」として、技術的発展を受容する社会的素地の重要性を指摘する。Benninghaus, pp. 376–388.

25 Carl Snyder, "Bordering the Mysteries of Life and Mind: Dr. Loeb's Researches and Discoveries." *McClure's Magazine* 18. 5 (1902), p. 388.

26 科学史家フィリップ・パウリは、レープの実験は精子を化学物質で代替したことで繁殖にオスが不要となる可能性さえ示しており、単為生殖の報告は大衆の間で「男性の潜在的な不必要性」や「処女懐胎」と結びついたとする。Philip Pauly, *Controlling Life: Jacques Loeb and the Engineering Ideal in Biology.* (New York: Oxford University Press, 1987), pp. 101–102.

27 Pauly, p. 93.

28 Jacques Loeb, "On the Nature of the Process of Fertilization and Artificial Production of Normal Larvae (Plutei) from Unfertilized Eggs of the Sea Urchin." *American Journal of Physiology* 3. 3 (1899), p. 138

29 Jacques Loeb, *Das Leben:*

1.2. 人工授精によるアルラウネの誕生と科学者たちの頽廃

エーヴェルスの『アルラウネ』は、この人工授精の時代に執筆された。伝説の木の根は、最新の科学により創造される少女アルラウネ・テン・ブリンケンとなり、この人間への応用可能性は、科学を担う者たちの道義性に対する疑念と共に、科学による伝承の具現化の中核を成すこととなる。

『アルラウネ』は物語が進行する16章に加えて、前後に序曲と終曲、そして5章と11章の後に間奏曲がそれぞれ挿入される。物語の筋が各章で展開されるのに対し、序曲、終曲と間奏曲では、女性に語りかける一人称形式で筋があらかじめ紹介されるとともに、内容に関する倫理的かつ規範的な省察が抒情的に描かれる[32]。この語り手の正体は明かされないものの、冒頭の序曲からすでに人工授精による創造行為は反規範的であると断じられ、アルラウネは「人間でも動物でもない――奇妙な生き物」(5) であり、枢密顧問官ヤーコプ・テン・ブリンケンによって「自然に反して」(5, 強調原文) 創造されたことが強調される。アルラウネの人工性は産物そのものではなく誕生のための技術に認められるが[33]、序曲内での創造を試みた者の上に崩れ落ち埋めてしまうゴーレムの連想を通じて人造人間として仄めかされるこの少女は、誕生と同時に創造主への応報を予告する[34]。

この新技術の導入にあたり、レープ同様、小説でも科学者たちは動物から始まり人間に向かう進化論的戦術を採用する。アルラウネ創造の着想は、ヤーコプによるヴォルコンスキー侯爵夫人への科学実験の説明から始まり、彼は自らの奇怪な「生殖細胞の移植や人工授精 (künstliche Befruchtung)」(44) の実験を紹介し、「猿の実験について語り、いま二匹のオナガザルがいるが、これに授乳しているその母親というのはまだ生娘で、雄猿を全く知らないと話した。」(45) この実験を聞いた侯爵夫人は、枢密顧問官は人工授精をひょっとして人間でも実行するだろうかとフランクに問いかけるが、これに彼は次のように嘲笑的に応答する。

> 全く疑う余地はありません。――今伯父はそれに取りかかっている最中で、――最近、新しい方法を発見したのですよ。当のあわれなるご婦人は、全くそれに気づかないくらい素晴らしい方法です。全然気づかない――ある日、自分が懐妊していることを感じるまではね。――そう、三か月目か四か月目に。――候妃殿下、顧問官にはくれぐれもご用心ください。誰にわかりましょう、候妃殿下がすでに孕んで――(47)

この直後、壁に飾られていた木の根が落下し、その瞬間にフラン

Vortrag auf dem Ersten Monisten-Kongresse zu Hamburg am 10. September 1911. (Leipzig: Alfred Kröner Verlag, 1911), S. 10.

30 "Chemical Creation of Life." *The New York Times* (March 1. 1905), p. 1. Cf. John Turney, "Life in the Laboratory：Public Responses to Experimental Biology." *Public Understanding of Science* 4 (1995), pp. 156–160.

31 Jacques Loeb, *The Mechanistic Conception of Life.* (Chicago: The University of Chicago Press, 1912), p. 3.

32 Freund, S. 36–37;「一方に枠と挿入の主観からの抒情的な普遍化があり、それは物語世界を超越しつつ倫理的かつ美的に筋の地平を定める。[…] 他方で筋では、語りの原則として無謬の (auktorial) 語りの立場があり、それが時折個々の人物に接近し、個人化する。」Ruthner, S. 101–102; また、ペトラ・ポルトは、このような構造化は小説の虚構性と作為性を認識させることで語り手の信頼性を減じ、筋の残酷な出来事を消費可能なものとすると論じた。Petra Porto, *Sexuelle Norm und Abweichung: Aspekte des literarischen und des theoretischen Diskurses der Frühen Moderne* (1890–1930). (München: belleville Verlag, 2011," S. 287–291.

33 Tanja Nusser, Es war einmal: Der Mörder, die Dirne, der Arzt und die künstliche Befruchtung. Hanns Heinz Ewers *Alraune*. In. Tanja Nusser und Elisabeth Strowick (Hrsg.) *Krankheit und Geschlecht: Diskursive Affären zwischen Literatur und Medizin.* (Würzburg: Königshausen & Neumann, 2002), S. 179. フランクは「生理学者にでも聞いてみるといい――きみはほかの誰ともまっ

クはアルラウネの創造を思いつく。彼は伯父に、「**アルラウネなるものをお作りなさい。生きている奴を、血も肉もある奴を！**」(52, 強調原文) と訴え、動物実験を人間に応用し、科学により伝説を実現するよう唆す。ここで医師ヤーコプには、生命を弄ぶファウスト的科学者の姿が重ねられる。フランクは、ファウスト博士に対するグレートヒェンのように、「ヤーコプ伯父さん、あなたは神を信じていらっしゃいますか (Ohm Jakob, glaubst du an Gott ?)」(63) と問いかける。だがメフィスト役を演じるフランクにも、既に先の侯爵夫人への応答の内に、彼が着想を脳内に孕んだ本当の瞬間について疑念がかけられており、彼の足元にも魔法の輪が巡っている。

科学の冒涜的不遜は既に明らかだが、実際に娼婦を探す場面において、科学批判はさらに直接的に描かれる。医師らは、科学の美名のもとで、下層の女性の産む機能のみを求める。ヤーコプの助手ペーターゼン医師は、人工授精の実験に同意する売春婦を探す困難を嘆くが、彼女らはネズミやサル、モルモットで実験を行ったと聞くや激高し、「年の市で見世物にでもなるような、何かそんな怪物を産ませようってんでしょう。頭が二つに、鼠の尻尾のついた子どもなんかをさ。[…] 人工授精なんぞ、お前さん自身がその手術を受ければいいんだ！」(104–105) と激しく反発する。

売春婦らの反発は、怪物を産み出す科学への不信感と共に、人間さえ動物と同様に扱い実験対象とする科学者たちの不遜を強調する。ヤーコプらの実験は純粋な科学の進歩のためではなく、彼らの節操のなさと欲望の表れである。ブランデンブルクは、この貪欲な中産階級について、「アルラウネの創造はあらゆる枢要な地位を占めながら、新たな成功戦略を欲する腐敗したエリートの権力への意志を示す。司法、経済、貴族は、遺伝子コードが無配慮と権力、死の寓話であるホムンクルスの創造に関与している[35]」と指摘する。『アルラウネ』における科学は、純粋な発展の追求ではなく、市民社会における学者らの高慢と頽廃の表出であり、人造人間創造の試みの反自然性は、技術的不遜のみならず、社会的な猥雑と逸脱に深く結びつく。このように生み出されたアルラウネは、成長に従い男たちを操り、転落させる魔術的な力を示すが、その前に行動に関する当時の科学観を検討したい。

たく同じ人間だって、きっとそう答えるだろうさ」(381) と述べ、アルラウネと人間の生理学的な相違を否定する。

34　序曲において、「最後には崩れ落ち、それを考え出した不遜な愚か者を瓦礫に埋めてしまう」(6) と予告され、また終曲でも同様の記述が反復される。Ewers, *Alraune*, S. 439. 独文学者のハンス・ブリットナッハーは、アルラウネを人造人間とみなし、創造行為の放埒さや創造主の醜悪さの点で『アルラウネ』をサマセット・モームの『魔術師』(1908) やE・T・A・ホフマンの『砂男』(1917) と並置した。Hans Richard Brittnacher, *Ästhetik des Horrors: Gespenster Vampir, Monster, Teufel und künstliche Menschen in der phantastischen Literatur.* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1994), S. 273–276.

35　Brandenburg, S. 173. クノブロッフも、「科学は […] 自ら遂行した実験に対して責任を取ることができない未熟な人々の仕事として描かれる」と指摘する。Knobloch, S. 114–115.

第2節　悲劇の不確定性によるアルラウネの媒体化――科学と魔術、アルラウネと男たちの間の破滅の動因の多重性

2.1. レープの向性理論とエーヴェルスによる批判

世紀転換期から第一次世界大戦にかけて、人工授精に関する科学技術の発展とそれに対する大衆の高揚があり、そこでレープが人工単為発生実験によって名声を博したことは既に述べた。だが、当時彼が議論を呼ぶ科学者であったのは、単為発生の実験のみならず、彼の機械論的科学観に由来しており、エーヴェルスのレープに対する反感も、この包括的な科学観を巡る問題に基づく。

レープの機械論的科学観とは、簡潔に述べれば、有機体には生命力のような特別な原理があるという生気論を排し、生命現象は「**余すところなく**物理的化学的（physikalisch-chemisch）に説明されうる[36]」とする立場である。人工単為発生の実験において彼は、精子を化学物質で代替することで授精のメカニズムに物質の化学反応に基づいた説明を与えた。だが彼はそれにとどまらず、あらゆる生命現象について同様の立場をとり、生物の行動や本能に関しても「動物の本能や意志の簡単な表れは、少なくとも原則として物理的化学的に説明することが、今日では可能である[37]」と主張し、生物の行動を無機物界の場合と同様の法則に従う反応へと還元することを目指した。

そこでレープが用いたのが向性（Tropism）理論である。向性とは、生物が外部刺激に応じた運動を示す反応のことであり[38]、例えば植物や動物が光を浴びた際、多くの場合その光の方向に向かう現象が観察される。彼はこの行動に対し、動植物は光や熱を好むといった擬人的説明を避け、光を浴びると有機体に備わった感光物質が反応し、生じた化学的変化が神経を通じて筋肉にも到達することで肉体の向きが変化するのだとして、運動は生物の意志から生じるのではなく、純粋な化学的作用に従って強制されるのだと主張した[39]。さらにレープは、人間の食欲や性欲といった本能も同様に解明されると訴える。

> 私たちの望みや希望、失望や苦しみは、本能にその起源をもり、それは昆虫の光本能と同等である。食欲とその不安、詩情と一連の結果を伴う性欲、幸運も悩みもある母性愛の本能、そして後ほど語られるこれ以外の諸本能も、そこから私たちの内的生活が展開する根源である。これらの本能には化学的基礎が示されるのだから、衝動のメカニズムの究明は、物理的化学的見地からは、ただ時間の問題である[40]。

36　Loeb, *Das Leben,* S. 5. 強調原文。

37　Loeb. *Das leben,* S. 40–41.

38　「植物や移動しない固着性の動物において、刺激の方向に対して形を変えたり、向きを変えたりする運動」を向性（tropism）という。石川統、黒岩常祥、塩見正衛、松本忠夫、守隆夫、八杉貞雄、山本正幸編著『生物学辞典』東京化学同人、2010年、429頁。現代の生物学では、植物の場合は屈性（tropism）、移動する動物の場合は走性（taxis）とするが、レープは向性を走性とも同様に用いている。太田次郎編『バイオサイエンス事典（新装版）』朝倉書店、2007年、115頁および137頁。

39　Jacques Loeb, *Forced Movements, Tropisms, and Animal Conduct.* (Philadelphia and London: J.B. Lippincott Company, 1918).

40　Loeb, Das *Leben,* S. 44.

このような主張を通じて、レープは機械論的生命観を奉じる当時の代表的な学者の一人となった[41]。だがエーヴェルスは、レープを代表とする還元主義的な科学観に反対し、自ら著した大衆向けの科学入門書『蟻』のなかで、「レープと彼の学徒の学説、『向性』理論は、つまるところ、全くの誤りである[42]」と批判し、有機体の振る舞いについて以下のように述べている。

> もしウニの行動がまったく反射的とされねばならないなら、人間の行動も同じく反射的とされねばならない。両者の間には、ほんの些細な相違さえないのだ。生きとし生けるものは――また死せるものも――いかなる化学的物理的刺激にも反射的に応答することは、疑いなく正しい。だがこの応答と並んで、あらゆる生き物はある特別な応答を行う。これのみが、生けるものを死せるものから分かつのだ[43]。

エーヴェルスは、例えばアメーバが狩りを行う際に獲物は純粋な化学的刺激を発しているとしても、アメーバがどのように狩りを行うか、あるいはどのように運動を継続的に変化させどの程度狩りを続けるかといったことは、特別な応答であり反射的ではないと主張した。また、アメーバを切断した場合核を有する部分のみが捕食のための仮足を伸ばすことから、エーヴェルスは、アメーバの核は人間の脳のような存在であり、その中に人間にとっての魂とでも言うべき、「アメーバの中のそれ（Es in der Amoebe）[44]」が存在すると想定した。

この「それ」については第3節において詳しく扱うこととするが、ともかくエーヴェルスは、当時を代表する生物学者エルンスト・ヘッケルやチャールズ・ダーウィン、さらには新生気論者も含め、生物学者達について次のように断じた。

> 魂の永遠の謎を私たちの因果機械学的（kausalmechanisch）理解に指一本の幅だけでも近づけることに、彼らの誰も成功しなかった。私が意識的な意思を通じて、この瞬間、右手を紙の上に走らせ書いていることは、因果的には全くとらえることができない――人間的に、想像できないのだ。機械自体を**組み立て**ることができて初めて、機械は本当に理解される。これは蒸気機関と同様、生体の機械にも当てはまる[45]。

真の理解を構築可能性と結びつけるエーヴェルスの言葉は、「私は、何らかの生命現象の完全な説明可能性は、それを一義的に物理的あるいは化学的手段によって支配するか、無機物において**あらゆる細**

41　レープはこの科学観のために、自然哲学の伝統の強いドイツ中産階級の価値観と対峙することとなった。Heiner Fangerau, "From Mephistopheles to Isaiah: Jacques Loeb, Technical Biology and War." *Social Studies of Science* 39. 2 (2009), p. 238.

42　Ewers, *Ameisen,* S. 519.

43　Ewers, *Ameisen,* S. 520. 強調原文。

44　Ewers, *Ameisen,* S. 521.

45　Ewers, *Ameisen,* S. 522. 強調原文。

部まで反復することに成功して、立証されるという前提に立つ[46]」として、支配こそが本当の理解とみなしたレープの姿勢と類似する。

だが『アルラウネ』では、人工授精によって創造された少女は科学の範疇をすり抜ける。ヤーコプの科学知識は、確かにアルラウネを造り出すことには成功するも、彼女の支配にも解明にも至ることがない。そしてこれは生体の現象の機械的説明という科学の原理的問題と同時に、科学者の猥雑な欲望と創造欲の問題となる。アルラウネの肉体や行動の科学的解明は絶えず中途で挫折し、魔術的領域が開かれることで、彼女の底知れなさが明らかになるばかりか、彼女を欲する男たちは自身の節操なき欲望の報いを受けることになる。

2.2. 科学的説明の退潮と魔術的不可思議の蔓延

『アルラウネ』の第二部、間奏曲に挟まれた第6章から第11章はアルラウネの成長と男たちの破滅を描くが、これらはヤーコプによる報告としてもたらされる。彼はアルラウネの誕生に際し、表紙に金字でA・T・Bと刻まれた一冊の皮の装幀の書物を用意させ、それにアルラウネの周囲で生じたあらゆる出来事や関係する事項を記録した[47]。そのため形式的には語り手によって描かれる『アルラウネ』の筋は、ヤーコプを通じて記されたことになり、その信憑性が減ずる代わりに多義性が生じる[48]。加えて彼は、A・T・Bにおいて医師として生理学的な説明を試みるが、その不完全さゆえに、アルラウネの周囲で相次ぐ不可思議な出来事の原因は常に判然としないまま残される。

枢密顧問官の手による報告は、ペーターゼンの最期から始まる。彼は、アルラウネの生得的な「膣閉鎖（Atresia vaginalis）[49]」（158）を解消するための容易な手術を行うが、手術後に敗血症でたちまち死亡してしまう。ペーターゼンによるアルマの死の詳細な報告とは対照的に[50]、死んだ医師には敗血症という簡潔な病理学的診断が与えられるのみで、「この所見には何の注釈も付されてはいない。」（166）だが彼が、伝説におけるアルラウネを引き抜く際に髪を結び付けられる犬の役割を果たしたことは疑いなく、最初の悲劇から魔術と科学の争いが覗く。

アルラウネをめぐる科学と不可思議の闘争は、彼女の肉体において展開する。「肉体はテクストにおいて、生来的正常性からの逸脱の場として機能化される[51]。」彼女と共に暮らす零落したゴントラム家の息子ヴォルフ・ゴントラムは、幼いアルラウネに求められるままイラクサの中を裸で転げまわり炎症だらけになるが、彼女には炎症は生じない。そのためヤーコプは、アルラウネの免疫についてA・

46 Jacques Loeb, „Sind die Lebenserscheinungen wissenschaftlich und vollständig erklärbar?“ *Die Umschau* 7 (1903), S. 21. 強調原文。ハイナー・ファンゲラウは「レープは、あるプロセスの真の理解は、それを意のままに再創造することもそれにより制御することも可能となって、初めて到達されるという意見だった」と評する。Heiner Fangerau, *Spinning the Scientific Web. Jacques Loeb (1859–1924) und sein Programm einer internationalen biomedizinischen Grundlagenforschung*. (Berlin: Akademie Verlag, 2010), S. 61.

47 Ewers, *Alraune,* S. 139–140. ただし用意したのはペーターゼンのため、間奏曲以前のアルマの出自や出産についての記録は、彼の手による。

48 Gmachl, S. 215.

49 太腿の間の癒着した状態での誕生は、アルラウネの身体的異常性のみならず、木の根の形状を連想させる。

50 ペーターゼン医師は、クロロフォルム麻酔、腰部麻酔、スコポラミン=モルヒネ、子宮破裂、出血過多など、病気に関する用語をふんだんに並べている。Ewers, *Alraune,* S. 158–159.

51 Romina Seefried, „Phantomata, Mensch oder Maschine?“ Zur Entgrenzung und Technisierung des künstlichen Körpers in der Literatur der Frühen Moderne. In. Dominik Groß und Ylva Söderfeldt (Hrsg.) *Überwindung der Körperlichkeit: Historische Perspektiven auf den künstlichen Körper*. (Kassel: Kassel University Press, 2015), S. 29.

T・Bの中で次のように報告する。

> ――そしてイラクサとサクラソウに触れると起こる蕁麻疹の発生に関する理路整然とした論文を、彼は茶色の皮綴じの本に書き入れた。その中で彼は、作用は純化学的なものであり、茎や葉の、皮膚を傷つける小さい毛が一種の酸を分泌し、それが傷ついた箇所に局部的な中毒症状を引き起こすことを論じた。サクラソウやイラクサに対するこの大変珍しい免疫（Immunität）が、はたして魔女や悪魔に取りつかれた人々の不感症と果たして、あるいはどの程度類似性があるのか、さらに、この二つの現象において、この免疫性を説明しうる原因が、ヒステリーを基礎として成り立つ自己暗示に求めねばならないものか、考察していた。（177–178）

アルラウネの肉体の逸脱性について、ヤーコプは炎症の化学的な考察から出発したにもかかわらず、次いで自己暗示という精神分析的領域に移行する。だが彼はここで留まらず、さらにアルラウネの特異性を分析するために伝説と一致する偶然の事象を探し、遂にアルラウネの出産がちょうど真夜中に起こったことに着目し、A・T・Bのそれを記録した個所に、「アルラウネはかくして生あるものの世界に呼び戻されたのである――**それに相応しいようにして**」（178, 強調原文）と追記する。科学者ヤーコプ自身が、自らの技術の産物の考察において純化学的な反応への還元を放棄し、伝承との暗合にその能力の由来を求めることは、合法則的な日常における科学規範の揺らぎを鮮明にする。

アルラウネの周囲に生じる破滅の解釈も、ヤーコプの退行と同様、科学的説明の探求から非合理的な原理への逃避に向かう経過をたどる。科学の優位は、動物ないし下層の人々についてのみ認められ[52]、彼女の魅力に屈する男たちの階級の上昇とともに、尋常ならざる存在の予感が強まり、アルラウネは男を死に誘う悪魔的運命の女となる。

しかしそれでも、アルラウネは悲劇の唯一の原因としては定められない。銃弾が彼女の記した手紙を撃ち抜き[53]、彼女との接吻の直後には死が訪れても[54]、男たちは相次ぐ悲劇に偶然あるいは肺炎といった他の説明を導入することで、日常の秩序を回復しようと試みる。この多義性による免責は、アルラウネの力の実体を未解明にとどめるばかりか、むしろ彼女の受動性を浮かび上がらせる。実際彼女は、周囲の不幸に対して何ら自発的な行動をとっていないのだ。A・T・Bを通したヤーコプによる報告形式のために、アルラウネの心理はほとんど描写されず、彼女の意思は覆い隠される。

また自発的行為の必要性は、アルラウネ自身によって否定される。

52　枢密顧問官は、「『彼女の影響力は人間にしか及ばず、動物の奴らは全く免疫（inmun）じゃわい』と教授は考えた。そして彼は、何のためらいもなく、百姓や下男たちを動物の中に数え入れていた。『彼らには動物と同じ健全な本能（Instinkt）が備わっとるんじゃ』」（222）として、彼らの忌避反応を生物学的に定位する。

53　アルラウネを巡る決闘において、弁護士カール・モーネンの銃弾が騎兵大尉ハンス・ゲロルディンゲンの胸ポケットに入れられたアルラウネの手紙を正確に撃ち抜いた時、犠牲者は「偶然の事故さ――忌々しい偶然だったんだ」（257）とモーネンを慰める。だが、彼もアルラウネへの求婚に用いた資金の横領で枢密顧問官に告発され、アメリカに逃亡せねばならず、偶然への逃避は悲劇を免れさせることができない。Ewers, *Alraune,* S. 239–258.

54　聖燭祭の仮装パーティー後、アルラウネとヴォルフは雪の中バルコニーに出る。運命の女アルラウネは彼に接吻し、唇を噛み、血が雪の上に滴る。しかしこの逢瀬の直後、ヴォルフは肺炎となり死んでしまう。Ewers, *Alraune,* S. 265–286.

ヴォルフの姉で同居するフリーダについて不満を漏らした時、何をするつもりか尋ねるフランクに対し彼女は、「どうするって、何もしないわ！何もする必要なんてないことを忘れたの。なにもかも自然にそうなるの」(423) と答える[55]。周囲から悲劇の不気味な源とみなされるにもかかわらず、呵責はおろか何の関心も示さないアルラウネの積極性の決定的欠如は、逆に彼女こそ受動的立場にあることを絶えず示唆する。

55 Walter Delabar, Unschlüssigkeit? Einige Überlegung über die Begründung des Phantastischen aus der Moderne am Beispiel von Hanns Heinz Ewers' *Alraune* (1911). In. Murnane und Godel (Hrsg.), S. 131

56 Freund, S. 45.

57 Anika Reichwald, *Das Phantasma der Assimilation. Interpretation des ≫Jüdischen≪ in den deutschen Phantastik 1890–1930.* (Göttingen: V & R unipress, 2017), S. 161. またライヒヴァルトはミソジニーともに、アルラウネの姿に世紀転換期のドイツ社会における同化ユダヤ人に対する嫌悪を見てとった。Reichwald, S. 147–177.

2.3. 媒体としての人造少女――アルラウネの受動性と父ヤーコプ・テン・ブリンケンの倒錯による破滅

アルラウネは周囲の人々の嫌悪とは対照的に自身の引き起こす災厄に不活発であり、悲劇は果たして本当に彼女が原因なのか判然としない。確かにアルラウネは、ヴィンフリート・フロイントが、「エーヴェルスの小説は、男性の規範設定的な支配を争いの余地なく最善のものであると示すために、女性を破壊的な性の悪魔として異化する男性の詩の伝統にある[56]」と指摘したように、男を堕落に誘うファム・ファタールの典型である。だが、アニカ・ライヒヴァルトは「女性はさらに、男性の陰極、不安と強迫観念の投影面とみなされる […]。彼女たちには怪物性が帰され、それは『官能的な権力女』および『悪魔的誘惑者』へと彼女たちを様式化する[57]」として、運命の女の成立における男性たちの不安を強調する。そもそも運命の女を形成するのは、男たちの隠された恐怖なのだ。

『アルラウネ』では、人造の少女ではなく男たちこそが不合理の動因であることは、性的支配性のみならず創造主の優位に対する懸念として、ヤーコプにおいて明かされる。人工授精を行った彼は、創造主としての地位を確信しており、A・T・Bにおける男たちの破滅の記録の直前には、枢密顧問官の確信が以下のように示される。

> むろんこのようにして、アルラウネの人生物語は、彼女の生みの親が書きおろす限り、彼女が行なった事柄の報告というよりは、他の人々が――彼女に影響されて実行した事柄の再現になってしまった。まず彼女と出会った人々の行動に、アルラウネという存在の人生が映っていた。枢密顧問官には、彼女がまったくもって一つの幻影であり、自分だけでは生きられぬおぼろげなものであり、紫外線となってまわりに反射し、自己の外部で生起する出来事においてはじめて形を成す影の存在であるように思われた。こうした思想に凝り固まった結果、ときどき彼は、彼女がおよそ人間だとは信じられなくなり、むしろ自分が

肉体も形をも与えてやったこの世ならぬものであって、自らが仮面を貸してやった血の通わぬ人形であるとみなした。それは彼の古い虚栄心をくすぐるものだった。というのも彼こそ、アルラウネによって引き起こされた一切の事件の根本原因であったから。(223–224)

ヤーコプは「アルラウネという媒体を通して表れるのは、結局のところ、自分の意志に他ならぬ」(224) として、アルラウネを一種の幻影あるいは人形とみなした。ルトナーは、アルラウネは「筋の動因かつ触媒であり、また不気味な恐怖および嫌悪の対象だが、真の筋の主体では決してな[58]」く、むしろ「男性の思想の形態化としての、自然に反する破壊的な女性の幻影の創造は、女性への忌むべき性欲の投影と、禁じられた願望の両義的かつ疚しい充足から生じる、その悪魔化を具現する[59]」と評する。アルラウネは、グマッハルによれば「投影面 (Projektionsfläche)[60]」であり、「彼女の周囲の抑圧された情熱が初めて姿を現すことができる鏡とみなしうる[61]。」アルラウネが鏡であるならば、光源はもちろん男たち自身であり、周囲に不運をもたらすアルラウネの引力の本質は、この少女から自らに再反射した彼らの欲望に他ならない。アルラウネの不可思議な能力は、科学の無力を示しているようでありながら、彼女を通じて明らかになるのは、真に科学的な制御も解明も受けず破滅をもたらすのは、男たちの情動であるということだ。

ヤーコプとフランクにとって、彼女は性欲の投影面にはとどまらない。人工授精によって誕生した彼女は、何よりも彼らの創造への果てなき欲求の具現である。そのため枢密顧問官自身も、小児愛的倒錯と彼の創造欲の化身たる少女への軽蔑ゆえに、その宿命を避けることができない。ヤーコプはアルラウネに対する情欲を抑えられず、自制の喪失について、「まるで、脳のまんなかに腫瘍ができ、それが肥大して、思考を圧迫するようだった。何か毒のある羽虫が耳か鼻から這い込んで、彼をつき刺したのだ」(292) と診断し、「もしかしたらここで、性的な倒錯は脳の生理学的逸脱に帰すことができるという理論がほのめかされたかもしれない[62]。」媒体アルラウネから自らの肉体に逸脱の追究の場を移し、医師ヤーコプは病理学的説明を試みるが、医学的解釈はもはや処方箋とはならない。投資の失敗および少女への暴行の嫌疑から国外逃亡を余儀なくされた枢密顧問官は、同行を拒否した彼女と離れることができず、遂には自殺を選ばざるを得ない。

アルラウネを媒体とみなしたヤーコプは、自らの欲望の再反射によりその身を滅ぼした。「性的な優勢を意のままにする可能性の転換と共に、アルラウネは父-娘関係を逆転させるのみならず、創造

58 Ruthner, S. 113.

59 Ruthner, S. 118.

60 Gmachl, S. 240.

61 Gmachl, S. 240; Seefried, S. 30.

62 Porto, S. 273.

者と被造物の役割を交換する[63]。」彼の科学的創造による生命の支配欲とその産物への小児愛的欲望は、結果的に彼の命を代償とせねばならなかった。破滅を招くのは男性自身の欲深さであり、そして科学はその内奥を明かし得ない。ヤーコプの科学と猥雑な欲望は、その産物であるアルラウネを前に自壊したのだ。

63　Brittnacher, S. 293.

64　フランクはこの免疫を自身の肉体的精神的な遍歴の結果と考えており、ヤーコプが動物の免疫を本能的とみなしていたのに対し、彼の免疫はむしろ獲得性である。Ewers, *Alraune,* S. 360.

第３節　創造の源を巡る権力闘争――創造者と被造物の由来への疑義

3.1. 思想の父フランク・ブラウンの投影面化

フランク・ブラウンは、ヤーコプが自殺する際に彼を後見人に定めたため、アルラウネのもとを訪れる。彼女と共に暮らし始めた彼は、自身の意に反した行動を強いるアルラウネの力を感じ取る。

> 彼を刺激する何かがあるのだった。それが**どのように**働きかけているか、彼にはよくわからなかった――感覚に働きかけるのか、血に働きかけるのか、それとも、ひょっとすると脳髄に対してなのかもしれぬ――しかし、それが働きかけているという事実は十分に感じられた。（358, 強調原文）

しかしフランクは、盲目的に外部の刺激に従う反射機械ではなく、彼はアルラウネの力に対し、枢密顧問官の戦術に倣い、生物学的に自らの免疫を頼りとし[64]、またアルラウネを「人形（Püppchen）」（360）とみなす。もっとも彼は、ヤーコプ以上に創造主としての優位を彼女に投影する。アルラウネは「馬鹿げた思想（Gedanken）の不埒な悦楽から生まれた」（5）存在であり、フランクは「かつて彼女を作り出したのは、彼、フランク・ブラウンだった。思想は彼のもので、伯父の手は道具に過ぎなかった。彼女は、閣下のというよりも、むしろ――彼の存在であった」（359）と考え、枢密顧問官の科学技術ではなく、自らの思想こそがアルラウネ誕生の真の動因とみなす。

しかしアルラウネとの闘争は、このフランクの思想の父としての立場を侵食する。彼女は、彼が実験を着想した瞬間に壁から木の根が落下したことから、「私が、この世に生まれ人間の形をとった、一つの思想だっていうなら、フランク・ブラウン、あなたはそれを仲介した道具に過ぎないんじゃなくって」（383）として、彼を器具の位階に貶める。これにフランクは、反論せずに以下のような考えに耽る。

「思想は、まるで花粉のように空中を舞い飛び、遊行した果てに、最後は誰かある人間の脳に舞い降りるのだ。そして大抵はそのままそこで萎えて枯れ、朽ち果ててしまう――ああ、肥沃な土壌を見出すものはごく僅かなのだ。ひょっとすると彼女の言う通りかも知れない」彼はそう考えた。「俺の頭はいつもあらゆる愚行や変ちくりんな空想のための、十分に施肥された良き苗床だったのだ」そして、かつてこうした思想の種を世の中へ投げ込んだのが自分だったのか――それとも、彼はそれを受け入れた肥沃な大地だったのか、そんなことはどうでもいいように思われた。(383–384)

フランクは自らを思想の起源としたが、もはや思想がどこから来たのかは不明となり、種である思想を受け入れた大地に自らを喩える。彼は、首を吊られた死人の精液が大地に落ちて発生したマンドラゴラ、あるいは人工授精によって豊饒な大地に喩えられる売春婦から生まれた少女アルラウネと同じ地点に向かう[65]。アルラウネに対し思想の父としての地位を投影したフランクは、彼女を通じて、自らも思想の投影面にすぎない可能性に至る。

65　フランクは最も放埒な売春婦を人工授精実験に用いる女性として探し、「頭のてっぺんから足先まで性」(123)であるアルマを見つけ出すが、彼女のことを「母なる大地(Mutter　Erde)」(123)とも呼ぶ。

66　Hanns Heinz Ewers, „Was ist Wahrheit?“ (der Nachlass von Hanns Heinz Ewers in Heinrich-Heine-Institute).

3.2. 創造性の源としての思想――有機体の中の「それ」について

フランクさえ媒体としたこの思想とは何だろうか。エーヴェルスは「何が真実か」と題した論説において、歴史学は事実を研究するため文学や芸術より上位であるとの見解に反論し、ジャンヌ・ダルクや赤髭王の例から、詩人が歴史の事実を虚飾することもあれば、反対に詩人の夢想が真実とされることもあるとして、「根源的なもの(das Ursprüngliche)は事実ではなく、思想(der Gedanke)なのだ。なぜなら、生じたことは常にただ思考の結果なのだから(das,　was geschieht, immer nur die Folge ist eines Denkens.)[66]」と述べる。思想を根源に据えることは、歴史や詩の領域にとどまらない。エーヴェルスは、『蟻』において、精神的現象を物質に還元する機械論的かつ唯物主義的な科学に対し、以下のように述べる。

二つのこと、時間と空間が全世界を成す。現在、私たちの知る原子は電子から成る。電子は想定上幾何学上の点で、大きさ無き力の中心である。それ故この点には力のみがあり物質はない。だが、物質がないところには空間もない。空間と同程度、時間がある――時間は実在しないのではなく、私たちが考える限り

> 実在する。始まりにはただ何か、私たちが考えたこと（*das, was wir denken*）がある――ただ考えられた世界のみが存在する（nur eine gedachte Welt existiert.）[67]。

エーヴェルスは、原子や電子に物質の基礎的な実体を求める科学者の見方を逆転させ、それらは仮想的な存在であり、むしろ思考されることで世界が存在すると訴える。彼が思想を根源とみなしたことについて、平田達治は『アルラウネ』の解説において次のように論じる。

> エーヴェルスが思想（ゲダンケン）と呼ぶものは、神知学者が神（ゴット）、神秘主義者が魂（ゼーレ）、医者が意識（ベブストザイン）、そして精神科医が精神（プシケ）と称するものと同じであり、彼にとっては生起するすべての現象の根源的原動力を成すものであって、あらゆる歴史的な事実もこれから生まれた単なる結果に過ぎず、思想ほどの意味は持たないのである。夢こそ、思想こそ、詩人の、そして芸術家の技、芸術を通して真実在となりうるものであり、単に物質を以て真実在と解するのは少年の犯す狼狽にも似た行為である、と彼は主張する[68]。

平田は思想を心理や魂と重ねたが、エーヴェルス自身の言葉を用いれば、根源的なものを、ただ「それ（Es）」と呼ぶことができる。エーヴェルスは『蟻』において動物の振る舞いを反射行動とみなす生物学を批判し、あらゆる生物の中に「≫それらのなかのそれ≪（≫*Es in ihnen*≪）[69]」を認め、「人間においてこのそれ（*Es*）を魂（Seele）と呼ぶならば、アメーバにおいて異なる名称を与える理由はない[70]」と訴える。そして、「それらのなかのそれ」は魂と重ね合わされるのみならず、以下のように、根源的なものとしてあらゆる現象をもたらすのだと述べる。

> そして疑いなく、心理（die Psyche）が根源的なものなのだ――他はみな、アメーバの仮足からゲーテのファウスト、ベートーヴェンの第九に至るまで、そこから生じたのだ。
> 「**それらのなかのそれ**」が生じさせるのだ[71]。

エーヴェルスは「それ」を、心理や魂を物質と化学反応に還元するレープ的な機械論的科学観に対置したばかりか、あらゆる現象の根源として「それ」を定め、作家の創造行為さえその作用に帰した。彼はボンの文学史協会での講演「芸術的創造」において自身の創作方法を説明した際に、詩を書く際の最初のアイデアを「種子（Samenkorn）」と呼び、「それを私は植え、そこから―ひょっとする

67　Ewers, *Ameisen,* S. 523. 強調原文。

68　平田達治「エーヴェルスとその時代」『アルラウネ』、310–311頁。ルビ原文。Vgl. Kugel, S. 405–406.

69　Ewers, *Ameisen,* S. 519. 強調原文。

70　Ewers, *Ameisen,* S. 521. 強調原文。

71　Ewers, *Ameisen,* S. 523. 強調原文。

と――いつか何かが育つかもしれない。だがそうではないかもしれず、ほとんどの種は芽を出さない。私は思想（den Gedanken）を何ヶ月も、しばしば何年も、抱えていなければならない[72]」と述べた。

だがエーヴェルスは、作家による思想の制御を否定する。そもそも「それ」が無ければ創造は不可能だが、「それ」は必ずしも意識的に操作できるものではなく、制作過程では突発的に苗床たる芸術家の内で発芽するのだ。

> 「中に」それがあるのだ、どこかに。ラーゲルレーブがゲスタ・ベルリングの物語を書いたのではなく――――「それ」（„es“）が、「彼女の中」で、その本を書いたのだ。
>
> ＊＊＊＊
>
> いかに「それ」を引き出すか、というのは滑稽なことだ。しばしば、それは夏至の嵐のように、問われることも望まれることもなく、出現する――歓喜に歌いながら、5月の泉のように流れ出す。それからまた、石から炎が噴き出るように、それは噴き出してきただろう。
>
> ＊＊＊＊
>
> だが、**そこ**にそれがあるに違いないのだ。いかなる天と地の陶酔も、中に何もない**その**脳から、何かを取り出すことはできない[73]。

創造行為が内部に巣食う所与の「それ」からの発生とされるとき、作家の主体性は曖昧となる。エーヴェルスは、「それ」を根源とみなすことで、生物の行動を化学反応に従って外部の刺激に盲目的に反応する単なる反射運動の集合とみなす機械論的科学観を批判したが、他方で内側に存在する不可知な「それ」の権能は特定されず、行為の動因は宙吊りになる。思想は、生物を意思無き化学的機械に還元する科学を揶揄しつつも、生物の行動の主体性を未解明にとどめる。

3.3. 敗北による生存――被造物の死と創造主の失墜

『アルラウネ』において、人造の少女が思想の産物とされるために、フランクの脳髄はもはや彼の構想や意志の唯一の起源とは認められない。確かに人造少女はフランクの脳裏に浮かんだ考えに由来するが、彼自身が苗床であり、彼の中に存在した何処より来たる思想から派生したのだから、アルラウネは彼の産物とは限定されない。創造主も被造物も、原因の不確定性を通じて、周囲に反映されることで初めて観測される媒体となり、ただ思想の起源に関する曖昧さの

72 Hanns Heinz Ewers, „Von künstlerischem Schaffen.“ *Mitteilungen der literarhistorischen Gesellschaft Bonn* 3 (1908), S. 206.

73 Hanns Heinz Ewers, „Der Dichter spricht: zum Thema: Genie.“ (der Nachlass von Hanns Heinz Ewers in Heinrich-Heine-Institute). 強調原文。

みが残される。

アルラウネとの権力闘争を通じて、フランクは彼女に対する優位を失い、同様の地位に転落する。消極性によって自己を媒体とし原因を多重化することが、アルラウネの権力闘争の戦略であったが、創造主フランクも、類似した手段を実行する。フランクはアルラウネとの闘争により思想の父としての地位を喪失したまま、相互に嗜虐的な性愛に溺れ、彼の敗北は、彼の被造物に対する支配の喪失と共に、アルラウネの淫靡な魅力の起源に対する疑問としても析出する。

> 彼は彼女の師だった――それは確かだった。彼は彼女の目を開かせ、東洋の国々のあらゆる大奥の秘事を教え、愛を一つの芸とした古代民族のあらゆる遊びを教えたのだ。しかしそれは、彼が未知のことを語っているのではなく、とうに彼女に備わっていたことについての記憶を呼び覚ましているにすぎぬようだった。（421）

フランクは、父でないばかりか師でもない。彼の思想ないしアルラウネの性の業は、呼び覚まされる以前から彼らの中にあらかじめ存在していたようだ。両者が発展するきっかけは木の根の落下とフランクの教育であるとしても、その最初の起点は常に一義的に定めることができない。アルラウネの創造において、ヤーコプとフランクは両者とも媒体に過ぎなかった。そしてアルラウネの淫らな魅力に関しても、元から存在したことが何かの契機で湧出してもそれは必ずしも自身の産物とは限らない以上、フランクは師としての地位を失う。

もっとも、この主体性の喪失のみが、フランクの創造主の地位から解き放ち、悲劇を免れさせる。最期の晩、アルラウネが夢遊状態で屋根の上を歩いているのを見た彼は呼びかけようとするも、同時に覚醒すれば彼女は墜落し、そしてそのために彼は助かるだろうことを予期する。だが、彼が逡巡を乗り越え叫ぼうとした瞬間に、フリーダが屋根の上に現れ、共に墜死する。ここで彼はフリーダを道具として「**僕の願い**」（436, 強調原文）であるアルラウネの死を達成したかもしれない。だが馭者のフローツハイムは、叫んだのはフリーダとして彼の行為であることを否定し、アルラウネの死の原因は複線化され、明かされないままとなる。結局フランクは、アルラウネが自身の受動性によって周囲に悲劇を生じさせたのと同じく、彼女を前に躊躇し無為にとどまったことで、アルラウネの死を招来し、自らの破滅を免れた。

確かにフランクは、アルラウネとの闘争を乗り越え、運命の女を調伏した男として、母の待つ故郷へと帰還する。だが、彼はもはや

規範を超越した勝者ではない。彼は、自身の欲望の再反射である、アルラウネによる行動の強制的支配に対するささやかな抵抗としての無為によって生き延びたに過ぎない。ヤーコプはアルラウネへの命令に固執しその身を滅ぼし、また多くの人造人間創造者らは、まさに創造主であるという故に身を滅ぼした。人間の創造という創造性の極点では、創造主の位階から降りぬ限り、その定めを免れることはできない。フランクの人工授精による人間創造の試みは、科学的な人間の解明や男性の優位の否認を経て、思想の根源としての彼の地位の否定となった。だがフランクにとっては、この創造主から権力の空位への転身のみが破滅から逃れる術であり、また、その身における科学的原理と魔術あるいは創造主と被造物の権力の多重化こそ、『アルラウネ』における幻想の源であった。

74　大戦中にアメリカの新聞に寄稿した「思想」の中でエーヴェルスは、「私たち人間は、**動物界**に属し、動物である。同時に、日ごと夜ごと、**植物界**に落ちる――眠りに。そして、火葬されようと埋葬されようと、鉱物界に終わる」と記している。Hanns Heinz Ewers, „So Gedanken.“ (der Nachlass von Hanns Heinz Ewers in Heinrich-Heine-Institute). 強調原文。

おわりに

人工授精によって誕生した少女の生涯と周囲の悲劇はアルラウネの死によって終わり、最後に終曲によって物語は閉じられる。序曲において「馬鹿げた思想の不埒な悦楽から生まれた――人間でも動物でもない――奇妙な生き物」(5) とされたアルラウネは、終曲では「動物ではない――奇妙な生き物」(439) とされる。ここで「人間ではない」と明示されないことは、一方では物語を通じてアルラウネは人間であると認められたようである。確かにアルラウネは魔術的な力を有し男を滅ぼす異質な存在であるが、悲劇には同時に合理的説明が用意されており、むしろ原因は彼女を媒体として願望の充足を図る、規範を逸脱した科学ないし男達の過剰な欲望にあった。

他方で、「動物ではない」とのみ表されることからは、人間と動物の境界の曖昧さが覗く。科学的には両者とも反射的機械であり、物理的化学的な還元により解明される存在である。もちろんエーヴェルスはこのような科学観には批判的であったが、有機と無機の世界を分かつ「それ」の存在は動物にも認めており、動物と人間の間に明快な区別を設定したのではない[74]。人間的でも動物的でもあり、また植物にも起源を持つアルラウネは、自らに具現される動物と人間の間の隔絶の否定を通じて、被造物に対する創造主の特権を剥ぎ取り、彼も思想の苗床に過ぎないと示唆する。

アルラウネ伝説の科学的実現において、フランク・ブラウンが自らの構想を他者を道具のように用いて遂行した英雄であったのか、あるいは思想に従ったに過ぎないのかは確定されない。『アルラウネ』での出来事は、常に原因が一義的に定められない。エーヴェルスは、最新の科学知識と古の伝承の混淆により現象の複数の説明可能性を

担保することで、大衆の科学に対する全般的な信頼と付随する嫌疑から成る両義的姿勢を刺激するとともに、合理的説明の裂け目に、彼の芸術的創造論と科学批判の中心をなす「それ」を織り込んだ。

『アルラウネ』において思想は、科学技術の有効性のみならず、創造主としての人間の権能を否定した。人工授精技術により人造人間を産み出す試みは、中産階級の猥雑な欲望と結びつきながら、不完全な科学的説明と男たちの破局を通じて戯画化された。だが媒体アルラウネからは、人間は化学的な反射機械ではないとしても、思想に従うに過ぎない可能性が浮かび、そして思想の由来は不明なまま残される。人間はもはや創造主ではなく、根源的な「それ」は物理的化学的な実体に基づいて分析されることもかなわない。『アルラウネ』においてエーヴェルスは、人造人間の可能性を示した科学の不遜のみならず、不確実性をもたらす思想の導入によって、生命現象の物質への機械的還元と人為的支配を訴える科学の世界観そのものに疑念を張り付けたのだ。

［付記］

本論は、日本学術振興会科学研究費助成事業（特別研究員奨励費：研究課題番号 19J14355）の研究成果の一部であり、現地調査に東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究機構奨学助成金（ZSP）を受領した。